

---

# A組の日下部君

メリメリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A組の日下部君

### 【Nコード】

N5574L

### 【作者名】

メリメリ

### 【あらすじ】

雫「A組に日下部君と言う人がいます」

香織「日下部君には凄い過去がありました…」

日下部「黙れお前ら」

雫・香織「あつ」

ルシフェル（もう帰りたいっ）

\*\*\*\*\*

注意

日下部君は最強です。

最強設定が嫌いな方は戻るを押して下さい。

この物語はギャグで出来ています。

致命的なミスを発見、直しました

あと、誤字多すぎる、もはや、それすらもギャグです。



## 1 ページ目

私のクラスには日下部謙治って名前の男の子がいます。

彼が転校して来たのは一ヶ月前の5月、彼の自己紹介は凄く印象に残ってる。

5月6日

ガラッと扉を開けて人の男の子が入ってきた。

第一印象はなんか怖そうな人だった。

背が175位あって、ガタイが良かった…、しかも、頬に傷跡があった。

どこの軍人ですかあなたは…

そんなことを思っていると、彼が教壇の前に立った

「日下部謙治」

暫しの間

えっ！？それだけ？

普通は日下部謙治です、よろしくお願いしますぐらい言っよね？

この時のクラスの皆もきつと同じ事を思ってたに違いない。

私は彼の第一印象はなんだが怖い人から、なんだが面白い人になった。

でも、面白かったのはそれきりで、それから今に至るまで日下部君は誰とも関わろうとしなかった。日下部君が来た初日は絡んでく

る人も居たけど、彼はあまりに、というか全然話さなかったみたいで、いつの間にか誰も話し掛けなくなった。

でもそれも当然かな…

それから女子の彼に対する陰口が凄かった。

あだ名はいつの間にか陰キャラになっていたみたい。

でもハッキリ言って、日下部君は凄くカッコいいと思う、なんかこう、今の日本に居ないような、男らしさを持っていると思う。でもあんまりタイプじゃないかな、あはは。

でも、いつも教室の片隅で一人で座ってるのは、やっぱり見えていて放って置けなくなる。

それに日下部君はなんだかいつも悲しそうな目をしてた。

て…なんか私は彼のことがかり見ているような気がする…むう

でも、なんか彼に話し掛けるのは怖かった。

なんな、でも、が多いな、あはは…

そんなこんなで気が付いたら、6月に入っていた。

「しずくちゃん」

突然、背後から能天気な声が聞こえた。

「ええっ！？ちよ、ちよつと止めてよ」

バフツ

背後から香織ちゃんが私に抱き着いてきた。ふんわりと薔薇の香りが私の周りに漂った。

「相変わらず、可愛い反応」

彼女は私の親友の橘香織ちゃん、中学校からの付き合いで凄く活発な女の子。女子も男子も分け隔てなく接していて、人望も厚かった。

「ねえ、さつき日下部君に話し掛けても、やっぱり駄目だった…あいつ…絶対仲良くなってやる！」

と、突然日下部君の話題がでて少し驚いた。香織ちゃんは唯一、ほぼ毎日日下部君に話し掛けている、彼女が言うには放って置けないらしい、いや、私も思ってるんだけど、なかなか一步を踏み出せない

いでいた、香織ちゃんの行動力にはいつも感心させられてばかり。  
「香織ちゃんなんて言っただけで声を掛けてるの？」

「んーと、おっはよう！とか昼御飯一緒に食べようよっ！とか…でも、どれも駄目で、えへへ…」

舌を出して笑う香織ちゃん、香織ちゃんはこんな性格もあってか男子に凄くモテる。私が香織ちゃんはモテるね〜って言うとなんか決まらずくちゃんには敵わないと言う、お世辞も大概にね。

という私も今日ある男子から呼び出しを受けていた。このことを香織ちゃんに話すと、あんた自分がモテるって自覚ないの！？あんたのファンの男子は凄く多いんだからね！もっと自覚しなさいっとな怒られてしまった。香織ちゃんにどうするのと聞かれたけど私は付き合う気なんてなかった。

やっぱりね、と香織ちゃん

と言うことで、放課後に屋上に行くことになった。

教室から出ようとしたら不意に。

「気をつける」

と言う声がした。

えっ？と思い振り返ると日下部君が私を見つめていた。

「えっ？どういうこと…ですか？」

何故か敬語になってしまったが、彼は無視して私の前を通り過ぎた。

なんだっただらろうと、私は思ったが、そのまま屋上に向かった。

屋上には男子が3人立っていた、何故3人も？疑問を抱きつつも私は彼らに歩み寄った。

「西條雫ちゃん、俺と付き合ってくれないか？」

3人の内の1人、茶髪の男子がそう言った。

なんて言うか、なんとなく分かってたけど、私は毎回の事だがこう言った。

「ごめんなさい」

と。

好きになってくれるのは嬉しいけれど付き合うまでにはいかないか  
な…

「そっか、俺の名前は桜田俊明、振られるのは分かってたけど、友達からお願いできないかな？」

「友達ならいいですよ」

私は笑顔でそう言った。桜田さんは私の顔を見て固まっていた。

それから桜田さんは走って屋上から出ていった。

私も戻ろうとした時、不意に肩を掴まれた。

桜田さんの横に居た2人の内の1人が私の肩をガツシリと掴んでいた。

「えっと…、離してくれませんか？」

「嫌だ」

「な、なん…で」

即答だった。その時の彼らはの目は怖かった。

「よくも桜田を振ってくれたな」

私は彼に抱き寄せられた。ドンッと彼の胸に顔があたる。なんでこうなるのよ…

「キヤッ」

小さな悲鳴を上げた。

力を込めて突き飛ばそうとしたけれど、力が入らなかった。

「ちょっと、止めてください……」

「嫌だっって言ってるだろ？浩二、屋上の扉閉めてきて」

浩二と呼ばれた男子は扉に向かって走って行った。

「なんでこんなことするんですか？」

男は私の顔を見るとニヤリと笑った。それがとても怖く感じた。

「好きだからに決まってるだろ、一回だけやらせてくれよ」

「嫌です……」

彼の抱き締める腕の力が強くなる。

「これでも嫌です言えるか？浩二！！後ろから抑える」

そう言った途端、背かを掴まれた、茶髪の男は私の制服の上から胸を触ってくる。

「やあだ」

私の抵抗も虚しく、胸を揉まれた。

「浩二、俺がこいつとヤったら、お前にもやらせてやるよ」

ニヤリと笑みを浮かべながら、私のスカートの中に手を…

「気をつけると言っただろ」

背後から声が聞こえた。彼らの動作も止まった。  
この声に聞き覚えがあった。

「誰だお前、こっちは楽しみ中なんだよ」

「そうか、じゃあ終わったら、消えろ、俺は彼女に渡す物がある」

「はあ？止めろとか言わねーのかよ…てか、なんならお前も加わるか？」

助けに来てくれたんじゃないの…私は絶望した。

「助けて、日下部くんっ」

「彼女は嫌がってるぞ」

「ちっちがう！そういうプレイだっ」

ただ怖かった、私は泣きながら助けを求めた。

「日下部君助けてよう…」

「離してやれ」

「おい、浩二、そいつを黙らせろっ！」

背中 of 捕まれる力が無くなった、私は前の男を突き飛ばし、日下部君の所に走った。

「クソツ、チクつたらぶつころすぞ、浩二、その男をボコれ！」

私は日下部君の後ろに隠れた。

「お前ら、人を殺したことあるか？」

日下部君がそう言った刹那、浩二が殴り掛かった、当たるっ、私は咄嗟に目を背けた。

あがつ　　と言う声とともに誰かが倒れた。

「お前…何をした…人差し指…だけとか…」

その声で恐る恐る顔を上げると、日下部君の前に浩二が倒れていた。

「弱すぎる、口だけの塵屑」

日下部君はそう言って、茶髪の男に歩み寄る。

「どうした、怖じけづいたか？」

茶髪の男の顔が真っ赤になる

「おおおおっ死ねやっ！」

茶髪の男は日下部君に向かって蹴りを放ったが、日下部君は人差し指を彼の靴の裏に当てた。

折れる、そう思った。だけど違った、人差し指で彼の蹴りを止め、彼は向こうのフェンスにぶっ飛んで行った。

「うそ…」

私は驚いた、あまりに非日常的な光景に、蹴りを人差し指で止めるだけでも驚きなのに、吹き飛ばしたのだ。

「大丈夫か？」

背中越しにそう聞かれた。

「うん、ありがとう日下部君」

ここから私と彼の物語が始まった。

## 2ページ目

4年は長すぎだ、全く。

彼は自室で呟いた

日下部謙治、彼は異世界で4年過ごした後、突然、現代に戻ってしまった。

思えば長かった、一生帰れないと思い、腹を決めて、ひたすら生き抜いた。

ギルドの最高ランクまで上り詰め、拳げ句の果てには敵国をたった1人で崩壊させてしまった。

異世界に来て最初は絶望した、魔物がいる世界で帰りたくても帰れない苦しみ、戦わなければ生きて行けない苦しみ。生き物を殺す苦しみ。様々な苦しみを乗り越えた。

気が付いたら、異世界で最強と呼ばれる存在にまでなっていた。

様々な人との出会い、分かれ。人を殺す恐怖、俺は耐え抜いた。

それがなんの前触れもなく現代に帰って来てしまった。

戻って来た当初は嬉しかった、だけど今は、正直、嬉しくはない。

心にポツかりと穴が空いてしまった。

何もやる気が起きない、平和な日常的に戻って来てしまったのだ。

俺は、行方不明扱いになっていた。そして自分の家が無かった。

両親は自殺してしまったのだ。

これに俺は絶望した。

自暴自棄になったが、俺はなんとか立ち直る事が出来た、あいつが居てくれたお陰だ。

(なに、沈んでんのよ、馬鹿みたい)

俺の奴隷、もとい下僕のルシフェルだ彼女が居たからこそ俺は立ち直れたのかもしれない…1週間早く。

彼女は進んで俺の中に住み着いている、彼女が言うには住み心地が最高らしい。

嘘である、俺が半強制的に契約させたのである。  
しかし、住み心地は良いらしい

でもなんだかんだ言って、彼女に頼りっぱなしのような気がする。

「お前には感謝してるぜ」

(な、なによ急に、このバカ)

「お前は、こっちに戻った原因がわかるか？」

(私も正直よくわからないわ…時空の歪みが起こったのは確かだけど…)

ルシフェルも何故急にこちらに戻ったのかわからないらしい。

そして、俺は高校に入ることにした。

高校に受かるのはもの凄く楽だった。

なんせ…

高校のテキストを一度見ただけで全て覚えてしまっただけだ。

そのまま、難なく二年生に差し込まれた。

俺は異世界で手に入れた力をこちらに持ってきてしまったようだ。

俺の将来は決まった。

平和な日本を混沌の渦に沈めようと。

（なんでそうなるの？バカなの死ぬの？）

いつそ、地球滅亡させるか  
(なんでこんなバカなの〜)

高校に入ったのは言いが、糞つまらなかった、これなら、ギルドで  
魔物狩りやっていたほうが百倍面白い

自己紹介すらだるい、俺は自分の名前だけ告げると席に座った。

休み時間そこらで

平和呆けな糞会話が聞こえる、複数の女子や男子が声を掛けてくる。  
どうでもいい内容だ、しかし、どこか懐かしい感じがした。だって  
4年もいたからな…

(ちゃんと返してやりなさいよ)

「めんどくさいの、それに今のマイブームは孤独なヒーローなの」

(バカ過ぎる…)

しかし、本当に答えることもめんどくさかった。

いつしか、陰キャラと呼ばれるようになっていた。

(陰キャラってどういう意味?)

(暗い人とのことを指すんだろ)

(ほら、こんな風になるでしょ?)

もう好きに呼んでくれ。

なんかもうどうでも良かった。俺に楽しみをくれ。

しかし、学校生活が2週間を過ぎてからか、やたらとある女子からの視線が気になった。

(あの娘、謙治のこと見すぎじゃない?)

「確かに、しかも哀れな目で見てくる」

(…あの娘とは話が合いそうね)

とあの娘はまじで哀想な人を見るような目で俺を見てくる。

そしてこの頃から、もう1人厄介な奴が現れた。

その女は香織と言った。

(また来たわよ、そろそろ何か言ってやったらどうなのよ)

「うるさい」

「ねえ、何独り言喋ってるの？」

こいつは強敵だ。魔物より強い。しつこさ的な意味で

「…」

「また、無視するわけー」  
顔を近付けて来た。

近い、近い、近い…

間近でみた彼女は整った顔立ちをしていた。

とうとうその手で来たかつ！

「あ、赤くなった」

顔が赤くなっていた。

（むう）

「…」

（バカみたい）

「…」

「えっ!?!」

「せーや ちうてアニメ面白いよね」

「あ、面白いよね、日下部君も観るんだ?」

「…」

(答えてあげなさいよ!)

そんなこんなで時は過ぎていき…。

6月

暑い…

昼休み、視線を感じつつも、またあの引っ付き無視がやってきた。字の如く、俺は話さない。自分でもわからないがこの学校に居るときは無口キャラを貫くことにした。

「おはっす、日下部っち  
ピキ

馴れ馴れしいぞ、薔薇の香り撒き散らしやがって。  
バラバラにするぞ。

(何それ上手く言ったつもりなの?)

「いや、上手いだろ」

「何が?食べ物?私は最近ハーゲンダッツにハマっててさ、日下部  
っちは?」

「  
…」

（2人ともバカなの？）

放課後になり、俺は帰る準備をしていた。

（このチャイムって言うの？無気味な音色ね）

お前の存在の方が不気味だろ…

(何か言った?)

「いえ」

(あの娘…)

「どうした?」

(男2人にマわされるわよ)

「ぶほ、気をつける!」

いきなり何を言い出すんだ!

「えっ?」

視線少女と視線がぶつかり合う

「…」

俺は無口で彼女の横を通りすぎて廊下にでた。

「おい、どういことだよ」

(さっきもあの娘、謙治のこと見てたから、これからどうするのか

な〜て思っ<sup>て</sup>、あの娘の未来を少し先を視ただけよ

「なんでそうなるんだよ」

(表情に熱を持ってたからよ、もしかして、謙治に…)

ルシフェルがよくわからなくなるときがある。

「ってさっきのは、ほんとだな？」

(なんで嘘つかないといけないのよっ)

俺は教室に戻ったが彼女は既に居なかった。

(このハンカチ、あの娘のじゃない?)

さっき彼女が立っていた場所にハンカチが落ちていた、俺は拾ってポケットにねじ込んだ。

(あんだねえ、物はもうちょっと大切にしなさいよね)

「うるせーよ!」

教室が静まり帰った。

教室に残って居た人達が一斉に俺の方を向いて固まっていた。

「ごめんなさいっ！」

1人の女子が謝ってきた。

「陰キヤラとか、もついいませんから」

あれ、そっちかよ！

「……」

「…わかればいい」

(可愛いところもあるのね)

「うるせーよ!」

!!!!!!!!!!!!

皆の視線がまた俺に注がれる。

さっきの女子が泣き始めた

「すみません、もういいません」

「私からも謝るから…」

別の女子も謝りだした。

(バカね)

俺は廊下に飛びだしていた。

「で、どこに居るんだ？」

（屋上よ）

俺は屋上に向かって走りだした。

屋上に向かう途中に泣きながら走ってくる男とすれ違った。

よっぽど悔しいことがあったんだな…

同情しつつ、屋上に向かった。

「づがっ」

（足下ちゃんと見なさいよ！）

階段で転び脛を強打した。別に痛くはないが、脛を打ったと想像してつい口に出してしまった。

しかし、無様過ぎる…

屋上に着くと勢いよく扉を開ける。

は？

男2人の間に視姦少女、いや、視姦女子が茶髪の胸の中で抱かれていた。

あれ？これいい感じじゃね？

(どこがよ、彼女嫌がってるのわからないの？)

「成る程…」

ならいつちよかつこよく決めるか

「ゴホン、気をつけろと言っただろ！」

彼らの動作が止まった。

「誰だお前、こっちは楽しみ中なんだよ」

「そうか、じゃあ終わったら、消えろ、俺は彼女に渡す物がある」

そう、ハンカチを渡す次いでと言っのがかっこいい

(駄目だこいつ…早くなんとかしないと…)

「はあ？止めるとか言わねーのかよ…てか、なんならお前も加わるか？」

この国もまだまだ捨てたもんじゃないな…こんなカスがいるなんて！

「助けて、日下部くんっ」

視姦女子が潤んだ瞳で助けを求めている、ヒロインばりに

「彼女は嫌がってるぞ」

「ちっちがう！そういうプレイだっ」

どんなプレイだよ、と突っ込みたかったが、COOLに決めなければ意味がない。

「日下部君助けてよう…」

俺を視姦し続けた視姦ヒロインもとうとう泣き始めた

「離してやれ」

「おい、浩二、そいつを黙らせるっ！」

と、彼女の乳を掴みながら指示を出す、ウンコ髪の男  
すると、視姦女子がヒロインばりに俺のところへ走ってきた。

「クソッ、チクつたらぶっころすぞ、浩二、その男をボコれ！」

ウンコ髪、いやウンコヘヤーの男がぶっころすとかほざいてる。

(最低の塵ね、私が出ていきたくない気分だけど、私が攻撃したら、この学校、無くなっちゃうわね…)

ルシフェルは強すぎるのだ…

俺はウンコヘヤー、いや、ウンコを睨みつけこう言った。

「お前ら、人を殺したことがあるか？」

戦闘…もはや、いづ必用もないぐらい

雑魚過ぎだろ！

(当たり前じゃない、謙治がその気になれば地球なんて簡単に墮ちるわよ)

ウンコを人差し指で吹き飛ばすと、視姦女子はありがとうと言ってきた。

あ、そうだ。俺はポケットに入っている、ハンカチを取り出し彼女に返した。彼女は目を丸くしていた。

「えっと…これを届けにきてくれたんですか？」

「…」

( かつこよく決めたいんでしょ？何か言いなさいよ )

「無言の方がかつこいいんだよ！」

「えっ！？あっそうですね、かつこいいです」

( 駄目だこいつら )

### 3 ページ目

日下部君…

はっ！私としたことが…

あれ一件以来、私は日下部君のことをよく見るようになっていた。

落ち着け私。最近の私はおかしいと思う、日下部君を見てると頭がぼーっとして、見てるだけで幸せになれる気がした、ついつい日下部君のことを目で追ってしまう。

はっ！私としたことが…

「日下部うち…作戦Sに移るわよ」

「…」

Sってなんだよ…てか作戦もなにもしてないだろ…それにしてもこの香織と言う女子、しつこすぎる…

(この会話に慣れてきた自分が悲しい…)

「しずくちゃんは本当可愛いわね、ねっ日下部っちもそう思うよね?」

レズかよ!

(同性愛をバカにしないでよね)

「お前もかよっ!」

「えっ!?! やっぱりそう思ったんだ、ねっね? 日下部っちはしずくっちのどんなところが好きなの?」

「…」

香織(引っ付き無視)は笑顔でうんうんと頷いている

「そっかそっか〜日下部っちも可愛いって思ってるんだね〜」

「…」

(慣れました…)

それにしてもあの一件以来、視姦しよ…稟と言う名前だったな、とやたらと目が合う、いやあれはもうガン見の領域だろ…、あいつの視線で俺は何度あいつにおかさ…

「く、日下部君!」

(謙治)

「はい」

突然のルシフェルの呼び出しに反射的に応えてしまった。

目の前に、おろおろしている雫がいた。

「あの、もし(家に帰ったら私は外にでるわよっ、私も久しぶりに外の空気を吸いたいのよ)か？」

雫が何か喋っていたが、それよりも…

まじかよ…

ルシフェルは正直目立ち過ぎる、彼女を見た人達はこう言うだろ、  
絶世の美女だと。

「お前は美人過ぎるからな…どうしよう」

「えっ」

あれ、視姦女子の雫が顔を真つ赤にして手で顔を覆っている。  
こいつ、さっき何か言ってたよな…  
何せ脳内で響く声でかき消されて全然聞こえなかった。

(えっ、な、なに言ってるのよっ褒めても何も出ないんだからっ)

「いや、美人だろ充分」

突然、雫が走り出して行った。

(ほら、見なさい、謙治が変なこと言うから、雫さん、どっか行っちゃったじゃない)

俺のせいだよ！

(何か言った?)

「何でもないです」

それにしても退屈だな…なんか起こらないかな…いつそ何か起こそうかな？

「日下部ってやついるか？」

突然、ドアが開けられ、俺の名を呼ぶ長髪のイケメン。

クラスからは黄色い声があがる。

(名前呼ばれてるわよ)

俺は無言で立ち上がり長髪の所に向かった。

長髪は身長が高かった。

「お前が速水と岸和田をやった奴だな？」

誰だそれ？

(前に雫さんに乱暴しようとした奴等じゃない？)

ああ、そんな名前だったのか。

「…」

しかし、答えない俺

「何とか言えよ」

「…」

「まあ、いいか、お前気を付けろよ、あいつら族呼ぶ話してたから」

あれ？こいついいやつじゃね？

久しぶりにまともな奴と会えたかも知れない。

「いや、族呼んだとしても無駄だから」

「余裕だなくでも危なくなったら、俺のこと呼べよな」

長髪は笑いながらそう言った。

「あ、俺の名前は前川玲二な、よろしく、えっと…日下部…」

「謙治だ」

「んじゃ謙治、またな」

そう言って玲二は出て行った、振り返って席に着こうとしたら、皆が俺の方を見ていた。

(皆見てるわね)

「はっ、まさか視姦…」

(バカじゃないの)

…またあいつだ。1人の女子、香織が俺の所にやって来た。

「日下部っち、玲二と何、話してたの？」

「…」

うんうんと頷く香織、いや、今ので何がわかった…

「日下部っちって玲二と何処で知り合ったの？」

「…」

いやー、こいつ何も言わなくても反応してくれる。こいつはお人形と会話出来るタイプだな。

( いい加減応えて上げなさいよ可哀想でしょ )

俺は目で会話を試みることにした。

( なんでもそうなるのよ！ )

「 な、なに？どうしたの日下部っち… 」

香織を真剣な眼差しで見つめる俺

今日初めてあいつとあったんだ！

「…」

ちよっと…急に日下部っちどうしちゃったの…ま、まさか告白…いや、駄目、しずくちゃんが好きな人を横取りなんて出来ない…ああ、どうしよう、なんか日下部っちが凄くかっこよく見えてきちゃった。

これが香織の心情である。

いや、目で会話はやっぱり無理だったな。

(当たり前でしょ)

おろおろしている香織の姿があった。

しかし、退屈だ、退屈だ。

昼休みになり、俺は屋上に向かった。

屋上には誰もいない。

退屈だけど、解放された気分だ！

( よっぽど参ってるのね )

屋上の中心で大の字になって寝転んだ。

あゝ綺麗な青空だな

( どこがよ、曇りじゃない )

空気読めよ

目を瞑った。風の音が耳を通り抜け、異世界に居たときを思い出していた。

( 謙治、見下ろされてるわよ )

目を開けると、女子が立っていた。おい…下着隠せよ、丸見え何だよカス

「…」

無言で下着を見た。

女子も俺の視線に気づき頬を朱色に染めながらスカートで抑えた。

「…」

「…」

スカートで隠しながら、無言で見下ろしている。

なんか喋れよ。

「…」

「…」

えっ、何、なんか通じ合ってる人みたいになってる！

「…」

(この娘、どうやら、何かのショックで話せなくなったみたいね)

そうきたか！

「…」

しかし、無言を通す俺。

「…」

「…」

あ、ちよつと笑つた。

(…)

「…」

こいつ、意外と、というか可愛いな。  
…

あつ、顔が赤くなつてる。

(なにももう通じあつてるのよー！)

「…」

「…」

合体っ！

⋮  
〔 ⋮ )  
⋮  
〔

〔 ⋮  
〔 ⋮  
〔 ⋮ )

〔 ⋮

〔 ⋮

〔 ⋮ )

〔 ⋮

〔 ⋮ )

キンコーンカーンコーン

さてと、戻るか。

（はっ 私まで無言に！）

俺は立ち上がり、無言女子に手を振って、教室に向かった。

放課後になり、家に帰ることにした。

（家に帰ったら私も外に出るわよ）

30分後、俺は族に囲まれていた。

（はぁ〜疲れる）

## 4 ページ目

日下部君…

日下部君、また、1人だ…

日下部君、かつこいいな〜

日下部君、なに考えてるんだろっ…

日下部君の好きな食べ物なんだろっ…

日下部君は好きな子っているのかな…もしかして、もう付き合ってるとか…そんなことないよね…あはは…

日下部君

日下部君日下部君っ 日下部くうん！

あの一件以来、私の想いは日に日に大きくなって行った。

胸が苦しい。     もしかしてこれって恋なの！？

私の中で日下部君で一杯になっていた。

今日も香織ちゃんが日下部君に話し掛ける……うっ、なんかかもかも  
やする……私も話し掛けたいよ……

でも、

勇気が…

香織ちゃんばかりずるいです…

あう、これって嫉妬かな…

うう…でも頑張らないと！

…香織ちゃんなんか楽しそう…やだやだあ！

私はこの時、あの人のことばかり考えていた。

私は偶然、日下部君と目あった。

話し掛けるチャンス！

私は勇気を振り絞り  
日下部君に近づいた。

「く、日下部君！」

言っちゃた、もう後戻りは出来ないっ

「はい」

返してくれた…それが嬉しくて、私は勢いで言ってしまった。

「あの、もしよかったら、一緒に帰りませんか？」  
言っちゃた…

心臓の鼓動が早くなった。  
トクントクンと小刻みな音に変わっていた。

「お前は美人過ぎるからな…どうしよう」

「えっ」

今、なんて言ったの…？ この返答に私は一瞬、頭の中が真っ白になっ  
て、言葉の意味を認識したときには、顔がとつても熱くなって、  
凄く恥ずかしくて、ああ、もう！日下部君！日下部君！日下部君の

ばかあ！卑怯だよ… 何も言えないよう、顔も見れないよう…

「美人じゃないよう…」

と俯いて反論することしか出来なかった。

私は美人と言われたことがあまりなかった、どちらかと言えば可愛いと言われることが多かった。

「いや、美人だろ充分」

私は、恥ずかしさのあまりこの場にいることが出来なくて、教室から飛び出していた。

顔が熱い、溶けちゃいそう…

私のこと美人って言うてくれた、それだけで充分だった、むしろお釣りが来るぐらいに。

少なくとも嫌ってはいない、女の子として見てくれてる。私はそれだけで幸せだった、今なら、香織ちゃんとキスぐらいなら出来そうな気分だった。

「日下部ってやついるか？」

突然、ドアが開けられ、玲ちゃんが日下部君の名前を呼んだ。

玲ちゃん？なんで玲ちゃんが日下部君を？  
いつの間に玲ちゃんは日下部君と仲良くなったんだろう…

クラスからは黄色い声があがった。

日下部君と玲ちゃんが何を話しているかわからないけど何だか楽しそうだった。2人がもつと仲良くなればいいな、そんなことを思いながら私は、ぼーと日下部君の背中を眺めていた。  
玲ちゃんが行ったあとに香織が日下部君の所にやって来ていた。

香織ちゃん、ずるいよう…

香織ちゃんは楽しみに日下部君と話している。

すると、日下部君は香織を見つめたまま、止まっていた。

え…なに、この雰囲気…まるでキスするみたいな…

やだあやだあ！キスやだあ！

私はそう言いたかった、涙目になりながらも息を殺して成り行きを見つめていた。

香織ちゃんは頬を赤く染め、目が泳いでいた。

とチャイムがなった。

私は溜め息をついていた。良かったと、そう思っていた。

香織ちゃんには負けてられない、そう決めた瞬間でもあった。

とりあえず、もう一度誘ってみようっ

私自身が変わろうとする切っ掛けだった。

恋する乙女は変わるか…

香織自身も同じ事

ちよつと…急に日下部っちどうしちゃったの…ま、まさか告白…いや、駄目、しずくちゃんが好きな人を横取りなんて出来ない…ああ、どうしよう、なんか日下部っちが凄くかっこよく見えてきちゃった。

今まで、香織もこのような感情になったことがなかった。

## 5 ページ目

30分前

俺の下駄箱に見馴れない紙が入っていた。

(なによそれ、もしかして、ラブレターってやつ?)  
「お前、ラブレターって言葉なんで知ってただよ」

(べ、別にいいでしょ、早く中身見せてよ!)

何故か急かすルシフェル。

ピンク色の可愛い手紙にはこう書いてあった

\*\*\*\*\*

正門から出て右に300メートル位のところにある、金武工場で待っています。

私のラブを貴方のハートに刺繍するゾッ

貴方のラヴアーマリアより

\*\*\*\*\*

(…)

…マリアって誰だよ、ここ日本だろ…

しかも字が明らかに男の物だった。

(畏ね)

「畏だな、よし行こう!」

(ちっぴりね、はぁ〜)

「面白そうだ」

暇潰しには調度良かった。

(でもそうね、私もこの文章書いたやつ顔が見たくなかったわ)

俺達は正門を抜けると金武工場へと向かった。

工場に着いた俺は大きなシャッターが全開になってる所から中に入った、どうみても金武工場は廃工場だった。

奥に金髪カツラとピンクのドレスを着たガタイの良い男が立っていた。俺に背を向けて立っていたので顔はわからなかった。

「よく着たわね、待ってましたわ」

思わず、吹きそつになった。

裏声がキモすぎる。

(…ねえ、殺しましょ)

「ぶっ」

ルシフェルのあまりに直球な台詞に吹いてしまった。

「そんな、興奮しなくていいのよ、貴方は私のラヴァーなのだから」  
興奮するわけねーだろカス。むしろお前の裏声と台詞に鳥肌が立つわ。

(酷すぎる…早く殺しましょ)

俺は無性にこいつの顔が見たくなった。

俺が近づいた瞬間、ブン、ブンとバイクの音が後方から聞こえて来た、音の数が幾つも重複され、さながら魔物の叫びにも似ていた。

後ろを振り返ると15台程のバイクがシャッターの前に並んでいた。

彼らから敵意の籠った視線が俺に注がれる。

俺は胸の高鳴り、高揚感、興奮、そのような感情を覚えた。

(相変わらずの悪い癖ね…)

「はははははっ、お前どんだけ飢えてんだよ」

と、背後から、あの裏声が聞こえた。

振り返ると、とてもマリアとは言い難いオカマ野郎が顔を拝むことが出来た。

「はははははは、俺に欲情してんじゃねーよ」

裏声じゃなくて地声かよ…

(私の出番ね、いえ、私がアイツを殺すわ)

「いや、お前は出るなよ」

「あ？今…なんつった？」

と、オカマ野郎の表情が変わった。

「…」

迫力無さすぎだろ…

「おいつ！お前ら聞いたか、俺なんて不用なんだとさ！」

なんでそうなるんだよ。

オカマ野郎はシャッター近くにいる不良達にそう叫んでいた。

不良達は笑い声を上げている。

あー、なんか急に飽きてきた…こいつら人間だった…期待出来そうにないな

「ルシフェル」

(急になによっ)

「今日、お前の姿見るの楽しみにしてるぜ」

(えっ…な、な、急に、謙治のバカ…見たかったら何時でも見せてあげるわよ…)

「はははは、こいつ俺に」「うるせーよ！」

「ふっ！」

デコピンをお腹に放ち吹き飛ばした、反対側のシャッターにガシャンと音を立てて突っ込んでいった。

静まりかえる工場内。

なんか、急にやる気が無くなってしまった。オカマの顔を拝めたからいいか。俺は不良達がいる方へ歩いて行った、不良達は固まっていた、目を丸くして化け物を見るような目で俺を見てくる。

(早く帰りましょっ)

「何もしないなら、俺は何もしない、だから、そこを通せ塵カス野郎ども」

「あっ？俺のこと誰だか知ってつか？真南高校の番張ってる、暴れ牛の達也だぞ」

不良の中の丸々と太った1人が金属バットを持ち、そうやってきた。

「お前、よくもうちの族の頭潰してくれたな、わかってるだろうな」

「何もしない…」

ガンッと音を立てて頭をバットで殴られた。

(彼、死んだわね)

ピキ

ゴンッとまた殴られた、周りの不良もバットを持ちだした。

牛野郎がもう一度俺に向かってバットを振り下ろした

「何もしないなら、何もしないって言ったの聞こえなかったのか」

牛野郎のバットを片手で受け止め、そのままバットを握り潰した。

じゅつと音を立てて握った部分の上の部分が床に落ちた。

牛野郎は顔面蒼白になっている。

俺はそのまま、牛野郎の腰に向かって蹴りを放った。  
かなり加減しているが、正直殺したかもしれない…

ボキゴキ、グシャ、ボキつと鈍い音を立てバイクと不良数人を巻き込み横に吹っ飛んで行った。  
ガシャ、ガシャン、ドンつと音を立てて壁にめり込んでいる。

(死んだんじゃない?)

「ああなりたくなければ何もするな」

俺がそう告げると、不良達は走って逃げて行った。

俺はそのまま、家に帰った。

後に金武工場の惨劇と呼ばれた。

意識不明の重体 1名 重傷5名

自宅

「ねえ、なんか恥ずかしいわよこれ……」

ルシフェルいや、今はエリーと言う名前か、エリーはゴスロリの衣装を着ていた。

「だから、明日、一緒に買いに行こう、今日はこれで我慢して、なんでこの家にこれしかないんだよ」「

「へい、すみません旦那、おい、お前ら、このエリーさんに似合う服を買ってこいやっ！」

部下達はへい、と言うと急いで部屋を飛び出して行った。

「あ、そうそう、エリーを襲ったりするなよ、俺みたいに加減しないから、死ぬぞ、多分600人ぐらいそれで死んでたから」

(な、何いってんのよ!)

と頭の中に響く。

皆、今の言葉で唾を呑んだ。

襲うつつもりだったのかよ!

事実、俺の強さを知っているから、それが嘘でないことがわかる。

「へ、へい、報告しときます、おい、お前ら旦那の女に手だしするなよゴラァっ！手だししたやつは、命ねーぞ」

部下達は高速で首を上下に振っている。

しかし、この家、事務所か、狭いな。

「しかし、旦那に歯向かったその族、勇気ありますな」

「多分、1人死んだわよ」

エリーの言葉に皆が一瞬固まる。

「多分死んでないよ、でも、良くて植物人間かな」

フォローになっていなかった。

「旦那なそれも普通の生活できないんじゃない？」

「向こうが悪いのよ、バットで謙治を殴るから」

すかさず、エリーが反論する。

「この話しはやめだ、それにしてもエリー、似合ってるよ」

「あ、ありがとう…」

頬を染めて、顔を背けるエリー。

「謙治が着てほしいっていうなら、また着てあげてもいいわよっ」

部下が何人が倒れた。

こいつ、男殺しだ…

「それにしてもエリーさんは本当に美人だね、いや、旦那が最初につれて来たときは本当に驚いた、正直、見惚れてしまったな、あははっ、いや、こんな美人な人が居るんだな、この世中もまだまだ捨てたもんじゃないなっ…ところでエリーさんのその髪は染めたのですかい？」

「え？ああこれは地毛よ、やっぱり変えた方がいいのかしら……」

自分の髪を触りながらエリーは言う。

「いやいや、染めるなんて、銀色の髪が珍しくてつい」

いや、地毛が銀色の人なんてこの世にいないから！

「それじゃあ旦那、あっしらはもう帰りますわ、おい、お前らも帰るぞっ」

水谷さんが部下を連れて帰っていった。

「ルシフェル」

「…なによ」

ソファアーに座るゴスロリ

「身体貸してくれ」

ガシガシ ドカン！

片腕をぶっ飛ばされた。

まあ、すぐ元通りになったが。

「冗談だ」

「冗談でも言っていることと悪いことがあるでしょっ」

「すみません」

「でも、謙治が、えっと…そのどどどっしててもって言うなら…あう」

顔を抑えて首を左右に降り始めた。

「自爆乙」

「もー謙治のばかつ！」

ズゴゴゴドコン！と強烈なパンチをくらい、事務所の壁を破壊し俺は吹っ飛んで行った。

「あ、謙治っ大丈夫…よね」

こうして夜も更けていく。

俺とルシフェルの物語はまだまだ続きそうだ…

## 6ページ目

「ルシフェル、お前やっぱり戻れ」

「な、なんでよっ、一緒に行ってくれらって行ったじゃないっ」

「お前、美人過ぎて目立つんだよ、さっさと戻れカス」

「今日の謙治、酷いわ…」

ルシフェルの瞳が少し潤んでいた。

「…まあ、いいか、行こう」

弱いぞ俺！

ルシフェルは笑顔になり、俺の肘に手を絡めてくる。

「おい奴隷、腕を絡めるな」

「わ、私は奴隷じゃないんだからね、謙治は私のご主人様なんだからっ」

今日のルシフェルは一段とキモい。

「なんか言った？」

「いえ…」

弱すぎるぞ俺！

腕を絡めたまま、外に出た、もちろんゴスロリの服で。

「え？」

香織（引っ付き無視）と遭遇した

香織は目を丸くしてルシフェルの方をじっと見ている。

「日下部っち…その人もしかして…彼女とか？」

「…」

（はいはい、わかってる、喋らないつもりね）

「香織さん、私は妹の日下部エリーです、ねっ、お兄様？」

はっ？

なんでやねん！

なんで兄妹設定にしたねん！！

どうみても似てないだろ…

「…」

しかし無言な俺

「そうなんだっ！それにしても目下部っちの妹さん、エリちゃん  
いいよね？」

エリちゃんって凄く綺麗だね…」

信じたのかよ

「…」

「ほら、お兄様、そんな照れなくても」

「照れてるのはお前だろ」

はっ！無言キャラなのに！

「あはは、仲良いんだね、ところでエリちゃんは どうして私の名前

しってるの?」

「…」

(全部私に喋らすつもりなのね)

「お兄様が学校の事をよく話してくれるんです、香織さんのことはよく話していました」

香織は驚いた後、少し照れたような表情を浮かべた。

おい…なに無言キヤラ崩壊させるようなことってんだよっ、家でも無言キヤラだる普通はっ！

「あ、あう、そうなんだっ日下部っちってあんまり話さないから、へえーそうなんだ…ふーん、えへへ」

えへへ…じゃねーよ、ちょっとは疑えよキモいぞ、引っ付き無視香織っ

「あ、香織さんも一緒に行きませんか？」

おい、またややこしくなるだろ…

はあ〜まあいいか。

「えっと、どこ」服を買いに行く、妹の服を選んでくれ「う？あー、

それなら、まっかせなさい！」

俺は無言キャラ、俺は無視キャラ、俺は無言キャラ！  
くはっー何、喋ってんだよ俺！

そんなこんなで香織も一緒に行くことになった。  
買い物行くのだからなくなってきた…と言うか、さっき事務所の窓から  
水谷さんが見てたような…

俺達はここらにある、洋服店に入った。  
俺は店の外で待つこととなった。

「ここ私の行き付けなんだ、エリちゃん超スタイル良いから、何  
でも似合うと思うよ…しずくちゃんが日下部っちの妹さんを見たら  
どう思うだろう…」

「どっしたの？香織さん」

「うっん、それより早く決めよー」

はあ、退屈だ、退屈だ、退屈だ、退屈だ、退屈だ、

「あれ？おーい謙治っ」

長髪のイケメン、前川が向こうから走って来た。  
こいつ私服だと全然雰囲気違うのな。

俺は店の外にある椅子から立ち上がった。

「っお前、すげーよ、族一人で潰しただろ、俺、お前のこと見てたんだぜ、助けに行こうとしたときにあんなの見せられちゃーなー、謙治、お前強すぎだよ、救急車呼んどいたけど、ありゃーやりすぎだ、あはは」

覗きかつお前はっ、覗き前川！

「…くっ」

おっと、大胆な覗き発言に吹きそうになった。

「相変わらず、何も言わないんだな、ところで、お前こんなところ  
でなにしてた？」

こいつ…

「妹と香織という女を待っている」

覗き前川の表情が変わる

「なんだよ謙治、お前に妹なんていたのかよ、てか、香織ってA組  
の？」

「ああ」

「おお、あいつとは中学校からの友達でな、そっか、あいつに目を  
付けられたのか、ドンマイ！」

目を付けられたんだよ！

「っとまあ、それだけだ、俺ちつと用事あるから、それじゃあ、ま

たなっ  
」

と言いながら去って行く覗きと思ったたらUターンして戻ってきた。

「謙治、携帯もってつか？」

「  
…」

「いや、そこは答えるよ！」

バシッと胸を叩かれた。

突っ込まれただと…

「いや、ない」

こいつ…やるな！

キレといいタイミングといいかなりのレベルだ。

「お前、やるな…」

「な、なにがだよ」

いきなり焦りだす覗き。

「…」

ドンッとさっきの場所を叩いて見せた。

「な、お前…」

動揺する覗き、恐らく自分の突っ込みのことを言ってくれたことに驚いているようだ。

「まあまあだな、まあ褒めてやろう」

更に動揺する覗き。

恐らく突っ込みで褒められたことがないんだろう。可愛いやつだな。前川と呼んでやろう。

「そ、そっか、じゃ、じゃ、あな」

前川は走って行った。

「あれ？さっきのって玲二？」

香織とゴスロリを着たルシフェルが戻って来た。

「…」

香織の言葉には答えない俺

「答えて上げなさいよ…はっ！お兄様、香織さんに答えてあげてた  
らどうです？」

「ああ、前川だ」

弱いぞ俺！

「ねえ、なんだったの？」

「…」

バシッとルシフェルに突っ込まれた。香織には見えない位置からの的確な突っ込み。こいついつの間、口だけの突っ込みだと思っ  
て居たのに…

「何でここに居るのかと聞かれ、妹と香織を待っていると行ったら、どっか行っただ。」

突っ込みに負けた俺は答えることにした。

「ふーん、そっか、次はどうするの？」

紙袋を両手に持った香織が言った。

ここで、俺はさっきから気になることがある。

視線が凄い、やはり、ゴスロリを着たルシフェルは注目を集めるのだ。

だから嫌だったのだ。

この糞美人がさっさと戻れよ！

「帰るぞ」

と俺が言つと香織はえーと言つてきた。

こいつウゼエ…

「帰るぞ」

「えー」

「帰るぞ」

「えー」

「帰るぞ」

「えー」

「帰らない」

「えー、ハッ！」

引っ掛かったなバカめ！

(こいつらバカね…)

ルシフェルはそう思っただけであった。

## 7 ページ目

「理事長、今日転向してきた男子ですが：彼は何者ですか？全教科満点なんて、前代未聞ですよ」

この高校は全国的に見てもトップクラスの実績を誇っていて難関高校でも有名だった。

岸辺さんが彼の答案用紙を机に置いた。

「日下部謙治、17歳、4年前に自宅内で失踪した後行方不明、両親は3年前に死亡：」

4年の間、彼は一体何をしていたのか。

「：まさか、そうだ何処かで聞いたことがあると思っていたが、あの行方不明の男子が彼なのですか！？」

柏木学園高校、この学校にはもう1つの顔がある。

わけありの生徒を保護すると言う顔がある、警察や軍とも連携していて、現に、わけあり生徒が3名いる。

長谷川財閥の令嬢、長谷川れいかを護衛する、前川玲二。  
生徒会会長の北川ありさ。  
剣道部部長の坂本林。

だから私は

「彼を2年生に入れることにします」

\*\*\*\*\*

3年の速水先輩と岸和田先輩が2年生の男子にやられたらしい。

俺が謙治を知る切っ掛けとなった事件だ。

俺は中学校に入ってから、れいかの護衛を任されていた。もともと、長谷川財閥と前川特殊軍事コーポレーションとは長らく関係が続いていて、長谷川敏三と俺の父親はとても仲が良かった、俺は小学校の時から、父親に戦闘技術や護衛のノウハウを教えられ、鍛えられ

ていた。

「A組に転校してきた日下部って男子、かなり陰キャラらしい」

「でも、最初だから仕方がないんじゃない？」

「違うんだって、なんか話し掛けても無視するんだって」

「えーそれは酷いね」

女子達が転校生の話をしている。

日下部：一度、あつて見たいな。

放課後

俺は、いつも通りれいかと帰っていた。

「玲二聞いた？」

突然れいかが話掛けてきた。

「何が？」

「どうやら、速水先輩と岸和田先輩を倒したのA組の日下部君みたいなよ、転校そうそうやるわねえ」

またか：日下部：明日にでも彼と会うか。

俺はれいかと正門を潜った。

「明日知り合いの族を呼んで、日下部ってやつ半殺しにするわ」

正門を潜ったとき、横からそんな会話が聞こえた。

「場所何処がいい？金武、あそこの工場に呼び出そうぜ」

れいかが不安気な表情で俺を見てくる。

「ねえ、玲二…」

「構うな行くぞ」

俺はそう言つとそいつらの横を通り過ぎた。

俺は日下部がどう出るか興味があった。

本来なら、さっきの奴らを止めることを選んだが、日下部の実力が気になった、上級生2人を倒した実力を…

「ねえ、止めなくていいの？」

れいかは心配していた。

「いや、危なくなったら止める、明日は車で帰ってくれよ」

俺がそう言つとれいかは納得したみたいでそれ以上何も言つて来なかつた。

途中、れいかは指を座した。

「あれ、ひよつとして日下部君じゃない？」

日下部！？

俺は日下部を見たとき戦慄を覚えた、あれは、普通じゃない、人を何人も殺してきた、いや、幾多の戦場をくぐり抜けてきた、強者だと、俺は、直感で思った、いや、俺の感覚が告げていた。

とてつもなく強い……

日下部が建物の中に入っていった。

「言わなくていいの？」

れいかがもう一度言った。

「いや、明日にでも言っよ」

彼が知りたい。

いや、彼と戦ってみたいと思った。

「あの事務所って…」

れいかは何か考えていた。

「どうした？」

「なんでもない」

俺もそれ以上言わなかった。

れいかをお屋敷まで送って行くと。

俺は自宅に帰った、と言ってもらいかのお屋敷のすぐ横にあるんだが。

次の日、れいかと登校した後、休み時間に日下部のいる教室に向かった。

教室の扉を開け、日下部を呼んだ、学校での俺は陽気なキャラだ。

日下部がこちらに来た、俺の身体が震えている。本能が彼は危険と告げている。

「お前が、速水と岸和田をやった奴だな？」

俺は確認の為に聞いた。

「…」

日下部の表情が暗くなった。まるでお前も同じ目に会いたいのか、と言ってる様に思えた。

「何とか言えよ」

明るく、言っただけで見た、彼から放たれるオーラに負けてたまるかと無理に明るく。

「…」

しかし、彼は何も言わない、しかし、彼の目をみたらわかった、やったと、速水と岸和田をやったのはこの俺だと。

「まあ、いいか、お前気を付けろよ、あいつら族呼ぶ話してたから」

恐らく忠告しなくても彼は、皆殺しにすると。

「いや、族呼んだとしても無駄だから」

彼の言葉には確信があった、こう言ってるように思った、お前ら全員が束になっても勝てないと。

「余裕だなくでも危なくなったら、俺のこと呼べよな」

俺の精一杯の強がりだった、彼はきつと俺なんぞ手を貸さなくても1人でやってしまっただろう。

そして、放課後、俺は彼の後を着けた。

下駄箱から紙をとり出して見ていた、恐らく呼び出しの手紙だろうか。

しかし、その直後、俺は背筋が震えた、彼は笑っていたのだ、まるでこれから起こることを楽しみで仕方がないという感じで。

俺は先回りして、金武工場に向かった。

俺は金武工場の窓から中の様子を見ることにした、既に中には、1

人いるらしい、しかし、前においてある機材が邪魔顔は確認出来なかった、日下部の姿はハッキリと確認できた。

すると、バイクの音が聞こえた、日下部の後ろを見ると15台のバイクに乗った不良達が集結していた。

始まる、そう思い、俺は日下部の方をみた。

しかし、彼の表情を見た俺は、息を飲んだ、彼は微笑んでいたのだ、彼は、今から、リンチに会うと言つのに、普通ならばここで絶望した表情になる筈だ。  
しかし、彼の表情からは微塵もそのようにみて取れない、彼は楽しんでるのだ

「なんてやつ…」

俺がそう呟いた刹那、ドコンッと音を立てて何かにぶつかった音が聞こえた。

日下部の前に居た、女が消し飛んでいた。

今、彼は一体何をした、俺は数々の戦闘を目にしてきたがあのよう  
な攻撃であそこまでの威力を出すことが出来ない筈だ、いや、俺は  
それよりも別のことで冷や汗を流した、俺は訓練の時、女が相手な  
らばだれでも躊躇してしまふ、俺の唯一の欠点だった、しかし、彼  
は女だろうが躊躇なく攻撃した、恐らく彼は想像を絶する何かを経  
験してきたのだろう、じゃなきゃ女子を躊躇わずに攻撃することな  
ど不可能だ、俺はいよいよ日下部という存在が恐ろしくなった。

日下部は片手に前をつきだした姿勢のまま止まっている、しかし、  
彼は、突然、絶望した表情に変わった。

こんなところに女を持つてくるな、そういう表情にみて取れた、彼  
はそのまま不良達の方に、歩み寄っていった。

不良の中の1人が金属バット持ちながら、何かを叫んでいる、しか  
し、そいつの表情はどこか強かっているように感じた、俺はバット  
を持っていく、しかし、お前は素手だと…

すると突然、彼はバットを振りかざし日下部を殴りつけた、俺は反  
射的に窓ガラスを割ろうとした、いくら日下部が強いと言っても所  
詮は人間だ、バットを頭に食らって大丈夫なやつはいない、彼は二  
度、殴りつけた、俺は咄嗟にパンチしようと構えた、しかし、俺は  
目の前の光景に愕然とした。

日下部はバットをつかんでいた、しかも、その表情はどこか楽し気  
だった。

俺は軽い目眩を覚えた。

バットごときで倒せると思うなよ、彼はそう思っている気がした。

そして、彼は不良を蹴り飛ばした、そしてそれは俺を更に驚愕させた。

不良達とバイクを巻き込み壁にめり込んだのだ。

今までにない戦慄を覚えた、彼は化物だ…しかも、今までにあったやつらのなかじゃ比べ程にならないくらい、ぎゅっと握った拳は汗で湿っていた、日下部はそのまま、工場から去って言った。

俺は彼の強さの秘訣を知りたくなった。

救急車を呼びそのまま家に帰った俺は、もう使うこともないであろう3ミリの盗聴機を探した、これは俺が作った機械だ。

これを彼に付けて、彼の日常が知りたくなった。

日下部はあの事務所、入って行った、あそこに聞けば彼の場所が分かるだろう、俺はそうおもい、彼と接触してからどうやって盗聴機を付けるかを徹夜で考えた。

れいかが遊びに来たが帰って貰った。

次の日、俺は事務所に向かった。

今日もれいかに遊ぼうと誘われたが断った、しかし、そのせいで大分遅れてしまった。

それ程までに俺は日下部に夢中だった。

彼と仲良くなりたい。

事務所のチャイムをならすとスキンヘッドの男が出てきた。

「なんじゃいわれ、餓鬼はとつととけーれ!」

怯むことなく

「日下部の友達です」

と告げたとたん男の顔色が変わった。

「あ失礼しやしたつ、旦那のお友達かつ、旦那は妹さんと近くの洋服屋さん行きましたぜ」

妹、日下部に妹が居るとは…

「それは何処に？」

「すぐちかくにありますぜ、右に400メートル位のところにルシファーって店がある筈で、そこですぜ」

「ありがとう！」

俺はそう告げて走って行った。

そして彼の姿を見つけた。

俺は出来るだけ、偶然を装い

「あれ？おーい謙治っ」

しかし、俺はここでミスを犯した。

「っお前、すげーよ、族一人で潰しただろ、俺、お前のこと見てたんだぜ、助けに行こうとしたときにあんなの見せられちゃーなー、謙治、お前強すぎだよ、救急車呼んどいたけど、ありゃーやりすぎだ、あはは」

そう、彼の前に立つとテンションが上がってしまい、口を滑らしたのだ。

俺は額に脂汗をかいた

「…くっ」

彼は確かにくつと言った。  
そして彼は俺の顔を見た、  
このことをばらすなよと脅しているように感じた。

俺は唾を飲んだ。

「相変わらず、何も言わないんだな、ところで、お前こんなところ  
でなにしてた？」

俺は出来るだけ陽気に振る舞った内心、恐ろしかった。

「妹と香織という女を待っている」

「香織…まさか、香織も一緒だとは…」

「なんだよ謙治、お前に妹なんていたのかよ、てか、香織ってA組の？」

「ああ」

確認の為に聞いた、しかし、俺の意識は盗聴機の方にばかり向いてしまう。

「おお、あいつとは中学校からの友達でな、そっか、あいつに目

を付けられたのか？ドンマイ！」

彼の表情が曇った…くっ言い過ぎたか…冷や汗が額から流れ落ちる。

「っとまあ、それだけだ、俺ちっと用事あるから、それじゃあ、またなっ」

帰る途中、急に思い出した演技をして日下部のところに戻る

「謙治、携帯もってつか？」

携帯に盗聴機を付ける、俺の考えついた結論だった。

「…」

動かない、予想だにできなかった事態だ、恐らく出すであろうと思っ  
ていた携帯を出さなかった、いや、持っていないのか。

俺は最後の手段に移った。

「いや、そこは答えるよー!」

バシッと胸を叩いた。

手には盗聴機があり、彼の服に付けることが出来たが、このさい構ってられない、咄嗟に出てしまったんだ仕方がない、自分に言い聞かせた。

「いや、ない」

やはりか、しかし、もう付けてしまった。

「お前、やるな……」

しかし、ここで彼の口から予想だにしない言葉が出てきた。

これは即ち、俺が盗聴機を付けたことなのだろう。

俺は緊張した。

バレたのか…

彼の表情は微笑んでいた。

恐らく彼はこう言いたいんだろう、俺に盗聴機をつけたお前はなかなか根性があると…

「な、なにがだよ」

俺は内心動揺していた。  
誤魔化せない…

「…」

バシツと彼は無言でさっきの盗聴機を付けた場所を叩いた、腰に付けていたセンサーの反応が消えた。

確定だ。

俺には盗聴機をバレずに付けることなど出来ない、無言の威圧感が俺を襲う。

この盗聴機は決して壊れないような造りだ。しかし、彼はそれすらも破壊した。

「な、お前……」

もう何も言えない、彼には盗聴機すらも見抜かれた。俺は殺される、そう思った。

彼の瞳を見ればわかる、殺意の籠った瞳だ。

心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

「まあまあだな、まあ褒めてやろう」

救われた、そう思った、しかし、これは言い換えれば二度目はない、  
というふうに捉えられる。

「そ、そっか、じゃ、じゃ、あな」

俺は、彼にどうやっても勝つことが出来ないと悟ったのだ。

彼と仲良くなりたい、俺はそう思いながら家に帰った。

## 8 ページ目

「日下部っち、部活入らないの？」

「…」

(私 anymore も言わないわよっ)

香織がウザイ、漂う薔薇の香りもウザイ。

すべてがウザイ。

でも俺のギャグはウマイ。

(バカなの？ねえバカなんでしょ？)

視姦女子軍の視線もウザイ。

見すぎだろこっち…

視姦女子と話してる、前川のこっちをちまちま見てくる視線もウザイ。

何もかもウザイ、ウザイ。

(追い詰められてるわね)

ルシフェルの声もウザイ。

(何か言った？)

「何も言ってますん」

弱い俺もウザイ。

「林さん、また全国大会優勝だつて」

「あの強さ化け物でしょ」

女子達のわざわざ皆に聞こえるように他人の活躍を強調する会話もウザイ。

ウザイ。

「日下部っち、今変なこと考えてたでしょ、あんた私のどこ見てたの？」

頬を染めながら言う香織もウザイ。

自意識過剰も大概にせーよ

「…股関」

正直に言う俺もウザイ。

(やばいわ、謙治がウザ過ぎるっ)

口をパクパクさせている香織、金魚かお前は。

「日下部っちがそんな変態さんだったとは…」

「…」

ガラッと勢いよくドアが開かれた。

「日下部はいるかっ」

(呼ばれてるわよ)

金髪のポニーテールの女が俺を呼んでいた。

えっ？ 林さんっ？ 周りで口々に言っている、教室がざわついた。

お前ら人間が声だしたぐらいで騒ぎ過ぎだろ。

(あんたも人間だけどねっ)

しかし、俺は行かない。

(なんで行かないのよっ)

「日下部はいないのか？」

(ほら、呼んでるわよっ)

「日下部っちならここにいますっ」

香織が指を指して大声で言った。

「…」

ピキ

やめて下さいよ。薔薇と一緒にバラバラにするぞ

金髪がこっちにやって来た。

香織…お前まじで空気読めよ

静まり返る教室。

「お、お前が日下部だなっ？」

なにももってんだよっ

「…」

「日下部なのか？」

「…」

「日下部っちはあんまり話さないんだよね〜あはは」



(あんだね…)

しかし、こいつは何がいたんだっ！

「な、なんだっ、な、なぜ睨む…」

「…」

帰れ、帰れ、帰れ、帰れ

(謙治、最近あなた、おかしいわよ?)

「なんとかい」「黙れ」「ひっ！」

(怯えちゃってるじゃないっ)

「日下部っち、それは言い過ぎだと思っつよ……」

香織が慌てている。

「…すまない…」

なぜ謝る、金髪。

「お前はわかってたんだな」

なにがだよ、何一人で納得してんだよ。

(あー成る程ね、この娘、貴方と勝負したいみたいね)

勝負だと…

ふふふ

勝負か勝負か、よし、鬱憤ばらしにやっつけてやるか。

「今日の放課後、金武工場にこい」

「いいのか？」

「……」

「……わかった、ならば今日の放課後に会おう」

クラス中がざわついた。

噂の転校生が剣道部の主将に決闘を申し込んだ。

この話しは瞬く間に広まった。

ウザイ、ウザイ、ウザイ、ウザイ、ウザイ、ウザイ、  
ギャラリ〜多すぎだろ…

(当たり前じゃないっ)

工場内には既に何人もの生徒が押し掛けていた。

「日下部っ、これを使いえ」

剣道着を着た金髪が木刀を投げる。

「ルールは木刀を手放すか、もしくは降参するかだ」

なんというルールだ。

(こんなもんなんじゃない?)

やる気が無くなった…

金髪と俺は位置についた。

「では構えろっ、お前の実力、試さして貰う!」

「…黙れ」

「んなつ!?!」

「カスが」

「ひっ!」

顔が真っ赤になる金髪。

「…ひーひーほざくな、さっさと始めろっ」

「はひっ!」

なんだこいつ…ウザイ…

「それじゃーはじめっ!」

香織の合図とともに、金髪が踏み込んで来た。

木刀と木刀がぶつかり合っ…

「貰ったぞっ! 目下ぶべえっ!?!」

わけねーだろっがっ！

「んひゃ！」

木刀と木刀がぶつかり合った瞬間に金髪は吹っ飛んで行った。

(こっぴなっちゃんよのよね…)

騒然となる工場内、皆、今起こったことが理解出来なかったようだ。

「…しよ、勝者、日下部君…」

香織と何故か真っ先に雫と前川が金髪のところに走って行った。

「どうやら、受け身をとったらしく無事なようだった。」

（加減してそれなのよね…）

「あんだ…強すぎ…ってかなんでぶつかり合ったただけでああなるのっ？」

香織が驚いてる。

雫と前川は何も言わなかった。

「私の…負けだ…」

金髪がほざいてる、当たり前だろ…

「貴様は俺に一生勝てないっ！」

「あうっ!」

「俺からしたら貴様は塵以下だっ」

「ひっ!」

「この雑魚虫がっ!」

「ふひっ!」

「貴様は埃よりも軽いつ!」

「にゃっ!」

「貴様は俺の奴隷になる価値もないっ」

「はんっあ!」

「奴隷以下のいそぎんちやくがっ!」

「はうんっ!」

「豚の中の豚がっ!」

「ぶひい!」

「可愛いぞっ」

「はうっ!?!」

「貴様は本当に弱い、豚より弱いっ」

「あんっ！」

「プリン買ってこいっ」

「はいっ！」

「やっばいい」

「はうわ…」

顔を真っ赤にして涙目の金髪。

（鬼畜過ぎるわよっ）

「だが、俺以外のやつらなら、お前が一番強い。」

「え？」

「だから、安心しろ、だが俺にはどうあがいても勝てない、恨むなら、神を恨むんだなっ！」

「こんな喋ってる日下部っちは初めてみた…言ってることは酷すぎただけど…」

それから、剣道部の主将を一撃で倒した男というのが広まった。しかし、それからがうざかった。

放課後になると

「日下部様っ、私と一緒に帰らないかっ  
」

「…黙れ」

「はっっっ  
「…」



## 9 ページ目

族を1人で壊滅させた、そんな噂を聞いた、しかも、それがA組の転校生だという。

会いたい、一戦交えてみたい、そう思った。

「すまないが、A組の転校生の名前を教えてくださいか？」

「えっ！？林さんっ…えっと、たしか、日下部って名前だった筈…」

「ありがとう」

「あっ林さんっ！」

彼女が呼び止める

「試合…かつこよかったです…」

私は、笑顔でありがとうと言つとAクラスに向かったガラッと勢いよくドアを開けた。

「日下部はいるかっ」

元気よく言ってみた、これでどうかな。

反応がない、違ったか…

「日下部はいないのか？」

念のためもう一度呼んでみた。

「日下部っちならここにいますっ」

すぐに、1人の女子がそう言った、彼女が指を指した人物を見たとき、私は驚いた。

隙がない。

彼の体からは常にテンションが保たれていた。しかも、彼の瞳を見た私は背筋がピンとはりつめた感覚に陥った。

怖い、そう思った。

そんな筈はない、怖い等という感情はとうの昔に捨てた筈だ、だったらこの感情は一体…

私は、緊張感を保ったまま、彼の元に近づいた。

「お、お前が日下部だなっ？」

なんて、ことだ…隙を見せたのは私の方だ、彼の瞳を見たとき、微かに瞳の輝きが消えた様に思えた、私は思った、これは興味が消えた色だ。私も同じような経験をしたことがある、即ち、私は下に見られていると言うことだ。  
しかし、こいつは、本当に日下部なのだろうか…何も答えないところを見ると…

「日下部なのか？」

私はもう一度確認の為に言ってみた。  
いや…確かに、このオーラきつと日下部はこいつだろう。

「日下部っちはあんまり話さないんだよね〜あはは」

さっきの女子がそう言った、成る程、寡黙な奴か。

最近の若者より男らしい。しかし、彼の口から直接聞きたかった。

「そつなのか？」

私は、そう言ったが、何も応えない何故だ、私の問いに答える必要もないほどに私はお前からみて、どうでもいい存在なのか？

「なんとか言え！」

いつの間にか、私は声を荒げてそう言っていた。

「嫌だ」

その返答に私は耳を疑った、それは拒絶の言葉。

「はっ？」

私は、そう聞き返すことしか出来なかった…

「…」

完全なる拒絶だ、未だかつてないほどの…拒絶、私には初めての経験。

すると彼は突然睨みだした、私はまるで蛇に睨まれた蛙のように、動けなくなった、わたしはなんとか声を絞り出す。

「な、なんだっ、な、なぜ睨む…」

これが私に出来る、精一杯の反撃だった。

彼の瞳の色は完全に消えていた。

私は子供みたいに声を荒げることしか出来なかった。

「なんとかい「黙れ」ひっ！」

私の脳裏に稲妻が走って、そのまま、全身が痺れるような変な感覚に襲われた、まるで黙れという言葉が強烈なアルコールのような。

「…すまない…」

そうだここに来た理由は戦いを申し込む為だ、私はそれもすることなく、勝手に馬鹿みたいに怒ってしまっ…

「お前はわかってたんだな」

確認などしなくて、戦闘をするもの同士感覚で通じあえ。

大事なことを私は忘れていたのかもしれない…戦い以前の問題だな…

「今日の放課後、金武工場にこい」

突然彼の口から出た言葉に私は驚きを隠せなかった。

「いいのか？」

まさか、向こうから言うてくるとは…私は彼の優しさに感謝した。

「…わかった、ならば今日の放課後に会おう」

私は、彼との戦いが待ち遠しくなった。

私が、教室から出ると。

「林さん、彼と戦うんですか？」

たしか、前川だったな、彼がそう言ってきた、いや、彼も武を極めるもの、彼の日下部の強さに気づいているのだろう。

「ああ、奴は強い」

彼は真剣な眼差しで私を見たあと、私の覚悟がわかったのかそれ以上、何も言わなかった。

放課後になり私は胴着に着替え、金武工場へと向かった、既に何人もの生徒がいた。

そして、日下部も到着して、私と彼は向かい合った。

「日下部っ、これを使え」

私は2本ある木刀の内の1本を投げた。

「ルールは木刀を手放すか、もしくは降参するかだ」

私がルールを言うと彼の瞳が黒く濁った。

私は、正直、怖かった。

「では構えろっ、お前の実力、試さして貰う！」

私は、そう告げて構えた。

「…黙れ」

あっ…まただ、私の脳に稲妻が駆け巡った。  
頭が痺れる感覚に陥る。

「んなっ!?!」

なんか、熱い…

「カスが」

「ひっ!」

私の意思とは関係なく言葉が漏れる。

顔が熱い。私はおかしいんだろうか…

「…ひーひーほぞくな、ちっちと始めろっ」

鋭く放たれた言葉が私の脳を刺激する、ぼーと酔ったみたいに、身体を刺激する。

「はひっ！」

私はどうしてしまったんだ…

「それじゃーはじめっ！」

その合図で私は瞬時に脳を切り替えた。

私は体重を前にのせ一気に間合いを詰めた、日下部は全く、動かない、これは貰った。そう思った、私が渾身の一撃で彼の木刀を狙った、当たれば木刀を手放す

「貰ったぞっ！日下ぶべえっ！？」

木刀がぶつかりあった瞬間、もの凄い力に押された、木刀もろとも吹き飛ばされた。

一瞬、気を失いそうになるが、耐えた瞬間、段ボールの所にそのまま突っ込んだ。

圧倒的だった、悔しさを通り越して尊敬した。今までにあった誰よりも強い…

「…しよ、勝者、日下部君…」

遠くでそう、聞こえた。

負けてしまったんだ。けどあまり悔しくはなかった。

「林さん、大丈夫ですかっ？」

前川がそう言って手を貸してくれた。

「日下部はとてつもなく、強い男だ」

私が言うと、彼は笑った。

「あたり前じゃないですか」

私は、日下部の前まで来た。

「私の…負けだ…」

しかし、悔いはない。

「貴様は俺に一生勝てないっ！」

彼の突然の言葉が私を刺激する。  
彼に勝つ希望すらいだかせない。  
この感情が芽生えた。

いや、それよりも、私は、もう1

「あつっ！」

この言葉は反射的に出てしまう。何故だ

「俺からしたら貴様は塵以下だっ」

身体が痺れる。

私の身体が私じゃないみたいだ…

「ひっ！」

く…これは…

「この雑魚虫がっ！」

なんだか…

「ふひっ！」

とても

「貴様は埃よりも軽いつ！」

「こちよいかもしれん…」

「じゃっ！」

私はねこか！

「貴様は俺の奴隷になる価値もないっ」

身体がビリビリする。

「はんっあー！」

こんなはしたないこえを…！！？

「奴隷以下のいそぎんちゃくがっ！」

「はうんっ！」

「豚の中の豚がっ！」

「ぶひいー！」

「可愛いぞっ」

「はうんっ！？」

「貴様は本当に弱い、豚より弱いっ」

「あんっ！ー！」

「プリン買ったよっ」

ああっ！、もっと命令してくれっ！

「はっっ」

私はこんなこと言われてるのに、ニヤニヤしてると思っ

「やっばっ」

イッ、もっと、そんざいに扱ってくれ…

「はっわ…」

気持ちいいかもしれない…

私は変態かもしれない…

「だが、俺以外のやつらなら、お前が一番強い。」

「え？」

しかし、突然の言葉に私はドキッとした。

「だから、安心しろ、だが俺にはどうあがいても勝てない、恨むなら、神を恨むんだなっ！」

胸が熱い…はあはあはあ…

私は、それからというものの、日下部様に夢中だ。

## 10ページ目

「明日の休みに一緒に買い物に行きませんか？」

雫から、買い物に行こうと誘われた。

（一緒に行ってあげなさいよ）

「……」

雫しする……よし断わるじ。

（なんでよし、なんで断わるのよし）

「いいじゃねーか！」

「えっ良いんですか!?!」

しまったっ!

「…」

(ぷっ)

「笑ったなっ」

「あう、すみません…」

しょんぼりする雫。そのまま回れ右して、帰れ!

(あんだ、どんどん性格悪くなってない?)

「じゃあ、明日のお昼の1時に学校の正門前で待ってます」

そう言っと、自分の席に駆け足で戻っていった。

俺に平穩をくれ。

(退屈だとか言ってたのに、どっちなのよっ)

突然、ポケットが震えた。

水谷さんから貰った最新の携帯を取り出した。

「えっ、日下部っち、携帯もってんだっ!」

香織がいつの間にか背後にいた。 忍かお前はっ

携帯を開くと水谷さんから着信が着ている。

…、ハゲ…俺が学校に居るときは掛けてくんな。

(なんでそういつところは真面目なのよ)

俺はうんざりしながら通話ボタンを押して耳に当てた。

「旦那、すまねえ、俺達に手を貸してくれっ」

「…なんだ」

「あ、明日、地獄坂組と戦争することになった、旦那…力を貸してくれっ」

戦争だと…

「わかった」

「場所は…さ」

俺はそう言っただけで電話を切った。

(今、絶対何か言いかけたよね)

「何、なに？誰から電話？妹さん？」

電話を切った途端これかよ。

香織、どんだけ構って欲しいんだよ！

お前は寂しがり屋のネコかっ

「じゃー」

(何故わかったのっ！？)

「…」

ポケットがまた震えた。

ピッ

ブルル

ピッ

「じよ」

ピッ

震えた

ピッ

「場所は」

ピッ

「さっ」

ピッ

(あんだ、絶対楽しんでやってるでしょ)

香織が覗いている。

ブルル

「構ってやるから、向こう行ってろ、寂しがり屋のビッグキャット」

香織が顔をふせてパタパタ走って行った。

ピ  
ッ

\*\*\*\*\*

件名：

本文：

場所は坂峰倉庫っ

\*\*\*\*\*

くそっメールだったかつ！

(  
…  
)

\*\*\*\*\*

件名：Re：

本文：

ピ  
ッ

\*\*\*\*\*

いねぢよっつと

(…ッピッピッピッピッピッピッ)

ブルル

\*\*\*\*\*

件名：Re：Re

本文：

ぱびぷへびっ

\*\*\*\*\*

(馬鹿だこいつら…)

「日下部っち、いつ構ってくれるのにゃん？」

香織がにゃんこポーズをしながらそう聞いてきた。

いつそネコになって、どっか行けっ

(謙治はそういうのが好きなのかにゃん?)

ルシフェル、お前もかっ！

「日下部君を誘惑しちゃだめ」

いきなり雲がそう言いながら香織の手を引っ張った。

「ちょっと、しずくちゃん、何するのっ」

「誘惑しちゃヤダあ」

瞳を潤ませながらほざく雲。

「ゆ、誘惑なんてしてないわよっ」

「だって…」

「黙れお前ら」

「「あう」」

俺の一喝で大人しくなる2人。

<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<

とある男子生徒の心境。

清楚なキャラの雫ちゃんが… 壊れてきているっ！

俺の雫ちゃんがっ！

<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<

（）っていつか、あんた明日は隼さんと買い物行くんでしょ？

そうだった… いや、でもあれは俺の意志じゃ…

（）でも、断わらなかったじゃないのよ

…こうなれば

「隼」

俺は隼に呼び掛けた。

「はひっ！？」

驚いた表情のまま、恐る恐る近づいてくる。

「明日の買い物は中止だっ」

「えっ…」

もの凄い悲しい表情になった。

(な、あんたねえ…)

「その変わり、俺の携帯のアドレスを教える、喜べ、お前が女性、  
第一号だっ」

「えっ…ほんと?」

急にもの凄く笑顔になる雫。

「ああ」

こうして雫のアドレスをゲットした。

「私ともアドレス交換してにゃん」

まだネコやってんのかよ。

「…」

瞳を潤ませ、上目使いで俺を見上げてくる。

「駄目か…にゃ？」

「また、今度な」

「えー」

「えーじゃないっ」

「じゃあ今度必ず教えてねっ」

「…」

(じゃー)

家に帰ると、水谷さんとその部下達が俺を出迎えていた。

続く

## 番外

さてさて、10ページ目までできましたが、皆様楽しんで頂けたのなら幸いです。

まだ、拙いところも多いと思いますが、どうぞ温かく見守って下さい

皆様の感想をお待ちしています。

皆様の感想は私の物語の動力源になります。

ポロカスに言われるのは覚悟しています！

誤字、脱字、文章力を考えずただひたすら書きました。

今後物語が新たな展開を迎える予定です。

これからも、頑張ります。

尚、番外は11ページが更新次第削除しますので悪しからず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5574/>

---

A組の日下部君

2010年10月10日05時15分発行